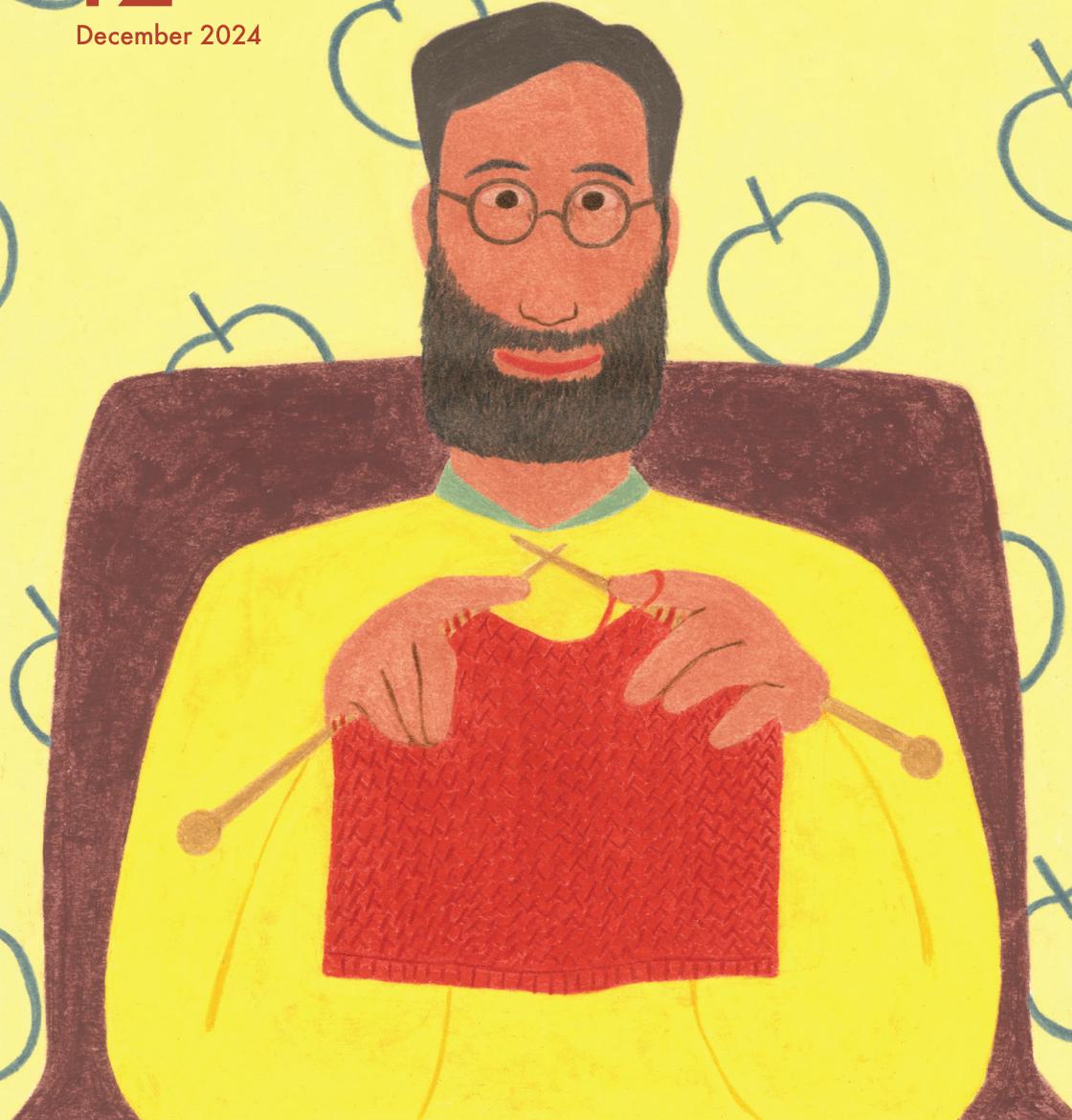


禅の友

Zen no Tomo

12

December 2024





ご本山だより
大本山永平寺【臘八摂心】

ろうはつせっしん

大本山永平寺
福井県吉田郡
〇七七六・六三・三一〇二



十二月八日はお釈迦さまが成道された日です。成道とは仏道を成就すること。つまりお釈迦さまが覚られた日です。私たちにとつてもっとも大切な出来事といつてもよいでしょう。それを記念し、お釈迦さまの報恩の思いを込めて摂心が行われます。

摂心とは集中して坐禅修行を行うことです。十二月を臘月ということから、「臘八摂心」と呼ばれています。

十二月一日から八日まで、毎日十回近く坐禅を行います。最終日は九日の深夜一時まで坐禅をし、最後に仏殿にてお釈迦さまのご供養をします。修行僧たちにとっては修行生活の中でも一つの大きな山場であることにちがいありません。

特に、一年目の修行僧は身心ともに永平寺の生活に慣れ、坐禅にも集中して取り組めるほどの力量がようやくついてきたころです。その中で、この臘八摂心を迎えるのです。これから始

まる坐禅修行を前に山内全体の緊張感が高まっていきます。

一日目、二日目のころは元気だった修行僧たちも三日目、四日目になると疲労の色が見え始めます。そのような疲れをいやしてくれるのが、全国の皆さまからいただくご供養の品々です。頂いたおいしいお菓子や食事がどれほど嬉しいものか、その時の喜びを筆者も今でもはつきりと覚えています。自分の力だけではなく、皆さまからの思いを励みにして八日間を乗り切っていくのです。

永平寺の生活は苦行ではありません。大変な出来事を乗り越えることが修行ではありません。しかし、特にこの摂心は足や体が痛く、体力も消耗します。この困難な状況の中で八日間坐禅をし続けることが出来たことが、修行僧の自信となります。そして、この修行を通して、お釈迦さまの教えを求めたいという一層強くなるのです。



ご本山だより

大本山總持寺

【法堂上に鍬を挿む人を見る】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



「光陰惜しむべし。時は人を待たず」と言われるように時間を惜しまなければならぬし、時は人を待ってくれません。頭では良く理解しているものの現実は中々困難なものです。

總持寺開祖瑩山禪師七百回大遠忌も十二月末を以て終了致します。期間中、沢山の焼香師さまをはじめ、法要にご加担いただきました全国からのご寺院さま、来山された檀信徒の皆さまのお蔭をもちまして無事円成の運びとなり、只々感謝を申し上げる次第であります。

一月一日の能登半島地震で隣県まで及ぶ甚大な被害が発生し、また九月には能登地方を中心とする豪雨災害によって尊い命までもが奪われ、門前町總持寺祖廟を故郷とする本山は心苦しく、悲痛な涙が込み上げてくるばかりであります。今こそ光陰を惜しみ、時は人を待ってくれないことを心

に刻まなければなりません。

さて十二月、總持寺では年中の最後の行持として一日から八日未明まで「臘八摂心」と言って一切の行持を停止して参禅に打ち込む修行が行われます。

これは、釈尊が臘八（十二月八日）の暁に大悟して成道したことに因んだ大切な修行期間なのです。曹洞宗の修行の根本は坐禅です。

標題は瑩山禪師の「辞世の句」の中にあることばです。修行とは絶えることなく続くものであり、またそれは田に鍬を入れ、種をまき、作物を育てることは教えを相承していくことを意味し、法堂においても日々の修行に精進していく修行僧を時には厳しく、そしてまた慈悲を以て指導していくことを示されたことばなのです。この行持が終わると愈々新年を迎える準備に入っていくのです。

選・坊城俊樹

百方に蟲の聲聞く瓦礫かな

東京都 鈴木 英治

評 この「瓦礫」とは天災によるものだろう。近年の地震や津波、洪水などによる悲劇は多大な犠牲者を出した。それを慰撫するかのような夜の虫が鳴き続けている。「蟲の聲」としたのは俳句では鳴く虫のことを指すので旧漢字にするのにも情がある。

鳴くものも咲くものもあり大花野

秋田県 高橋 カツ子

評 花野とは様々な生物の宝庫でもある。そこには蟋蟀のように鳴く虫も。あるいは小鳥たちの囀りもある。ひよっとすると獣の鳴く声も。そして様々な花がまた咲いている。それらをすべて抱きかかえているのが花野という小さな宇宙なのだろう。

◆ 雲ちぎれちぎれて夏の終わりなり

鳥取県 徳本義則

◆ 葛の香を孕みて風の吹く野かな

千葉県 野中修次

◆ 秩父路に兜木訪ねて曼珠沙華

埼玉県 新藤共子

◆ 御身拭白装束は手の平に

神奈川県 佐野 勇

◆ 円空の鑿跡深し晩夏光

東京都 須見祥子

◆ 稲穂波なだるる先に一撥の碑

埼玉県 小林茂之

◆ よちよちの掴む未来よ秋桜

埼玉県 野原孝子

◆ 盆栽と分け合ひ使ふ日向水

宮崎県 石濱 徹

◆ 山一つ海に凭れる良夜かな

島根県 石原清司

◆ かなかなや読経の鐘に相和して

福岡県 瀧田 緑

選者吟

案山子また伊達の男となりしかな

俊樹

【作句小見】 この句はだいぶ前なのだが、東北での秋の吟行旅行の時に作った。たしか宮城県あたりであったか。その案山子はなかなかしゃれていて古着の着物を纏わせていた。そんなところにも人々の生き様と同時におしゃれな心情が垣間見えていた。

選・長澤 ちづ

友人が断捨離にした盆栽をみやげにもらふ朝の散歩に

三重県 西村 廣視

評 作者も断捨離をせねばと思う世代であるのに、友人が処分した盆栽を貰って帰って来てしまったという処に味わいがある。盆栽は年月かけて作り上げてゆくものだけに処分は難しい。友人はさぞかし安堵したことだろう。

滝のさまなして降りぬし夕雨の遠のき堀に蟻螂すがる

岩手県 阿部 照子

評 最近の夏の雨は夕立などという風情のあるものではなく集中豪雨ともなり被害も生じる。そんな気象の変化にもめげず生き延びようとする蟻螂の懸命さに目を向ける一首。

◆ 夕焼けに声あるならば蝸のごと透き通るやと耳を澄ませり
北海道 加藤 智子

◆ 人は皆ベルソナ被り世を渡るホントの自分の在るすら忘れ
島根県 横山 豪吾

◆ 境内の大楠の葉の翳りよりふいにもれくる山鳩の声
埼玉県 白藤 巳玲

◆ いつしかにすださいし虫の減りゆきて遠海鳴りの幽かに聞こゆ
鳥取県 徳本 義則

◆ 見上ぐれば茜に染まる烏帽子岳の残照しばし息のみ見つむ
長野県 山崎 さと子

◆ 日に焼けたポスター剝がす夕暮の気急き風が秋を連れくる
鳥取県 眞山 博充

◆ 仏前の細き線香に火を点じ暫し聞きたり沈香の香を
秋田県 小松 紀子

◆ 虫の音に早くも秋の兆しあれどまだまだ続く残暑の厳し
愛知県 深谷 ハネ子

◆ ロボットの内視鏡手術にも用みらるる古代よりある縫合とふ技
島根県 宮廻 恒雄

◆ 迷い込みし足長蜂ののろのろと窓の外へと飛んで行きたり
山口県 濱田 道子

選者詠

白雨来て百合咲きいるに気づきたり線路わさなる
あら草のなか
ちづ

作歌小見

加藤さんの「夕焼けに声あるならば」の発想には新鮮な驚きがありました。また宮廻さんの「縫い合わす」という素朴な作業が、命と係わる最先端の医療技術でもあるという気付きにも感心しました。